

骨董集秘書

全

和装本

ケ 5

44

73



事物紀原三卷 宋朝會要引云「毬杖非古蓋唐世尚之以資

玩樂」あまは唐の時盛ん又 聖武天皇の御時ハ唐の玄宗の時ハ

つれハ毬のなるに和漢同時といふ〇唐の僖宗殊小こを

好り僖宗幸ハ 御國の貞觀仁和の比小つれ甲〇遼小これハ善擊者

の甲け甲遼史卷百姦臣傳下「耶律塔不以善擊鞬幸

於上凡馳騁鞬不離杖」と云えり淵鑑類函卷三十一巧藝部ハ

毬の古事あり小詩篇歌ホをり裁めれといふわつらハ

小毬を〇さハ毬より変別れて毬杖と稱一種の玩具小る

つれの比め詳ありハ宇都保物語小云え中ハ物小

ええハ源平盛衰記卷二云「法師の首を造て毬打の玉をち如杖造て

ちち打こちサ踏り踏り甲極小志り大衆兒共踏り踏り小物同ハ

是を當町世小踏り大改入道の首也答」平家物語卷二文覺上人

流及國ハ流されける時 後多羽院を毬打の冠者そちかつ後のそり

たるこいる不此君あまる毬打の玉をいぎを給る文覺かまふり口

ちけるありとり義經記卷牛若まりまりの後ハ云ハとりまりまりまり

ち中の玉のちめめをと甲甲のえふにけらりといちけりらん云

と名付一を清盛うひとけられる云」袖中抄親頭昭撰たまりけ

るの傳い云「十節錄黃帝云取虫を頭毬之取眼射之

云」毬杖是こ云」以彼例漢土年始用件事國中無云

事仍日本國学其例年始打毬杖云」日本歳時記小抄事たりの比

況あり」徒然抄十之卷「さぎち中ハ三月小打りまりを云云」後鳥羽院の御時の人當時

神泉苑ハありて燒ある云」「種の造」印作一改年初月控高

毬打云」白もええり神中抄の作者頭昭後鳥羽院の御時の人當時

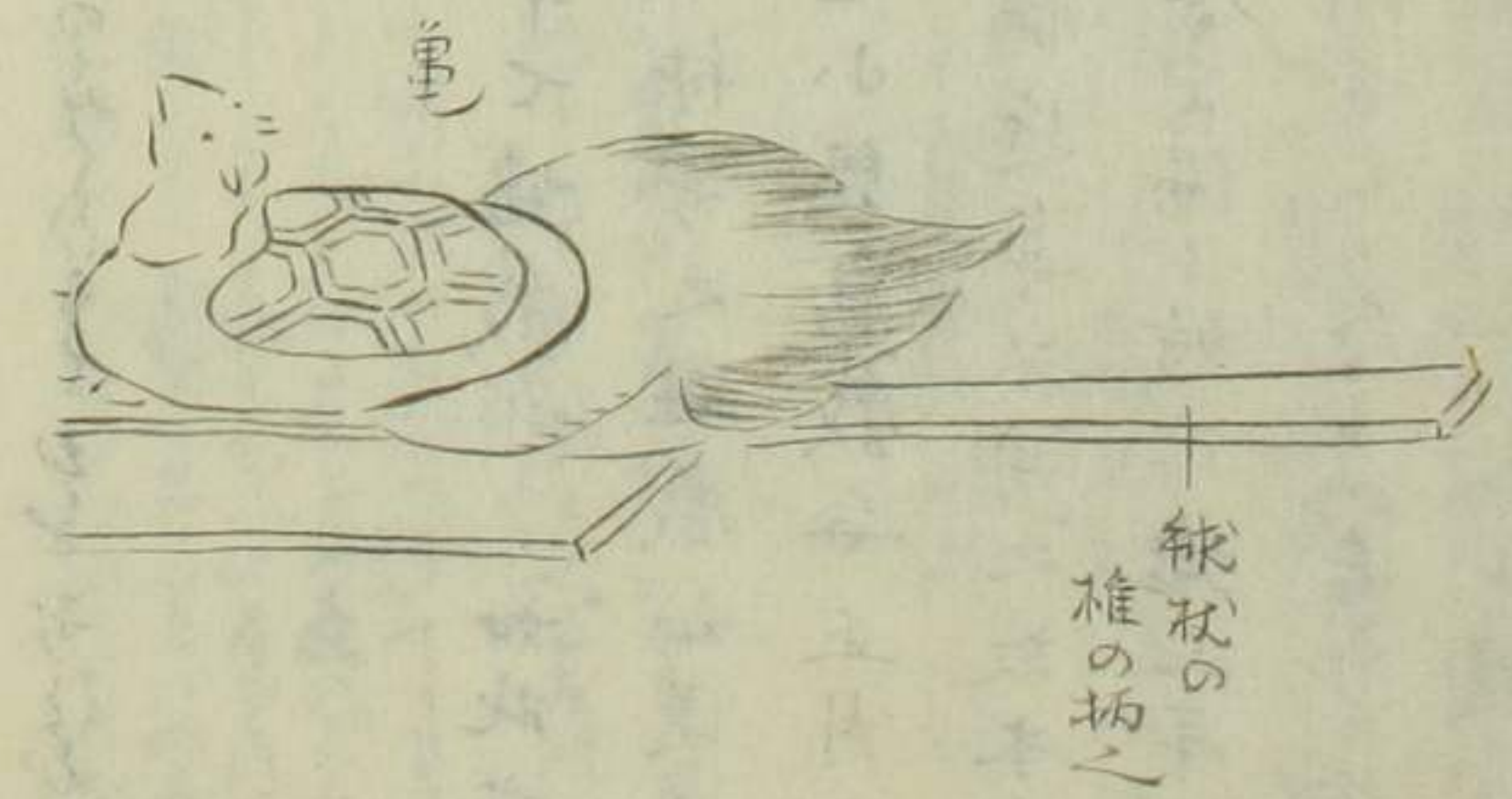
毬打云」白もええり神中抄の作者頭昭後鳥羽院の御時の人當時

是の如き小児の目をひくつむるの是の年の正月に男児おびあつくを
 かく女児お飾花をりて
 醒云々花とすもの室番以前にあり
 今いたてあきりつ比の巻おりしに二年め小りつてい
 是の年の正月に女児お飾花をりて
 今いたてあきりつ比の巻おりしに二年め小りつてい
 是の年の正月に女児お飾花をりて
 今いたてあきりつ比の巻おりしに二年め小りつてい

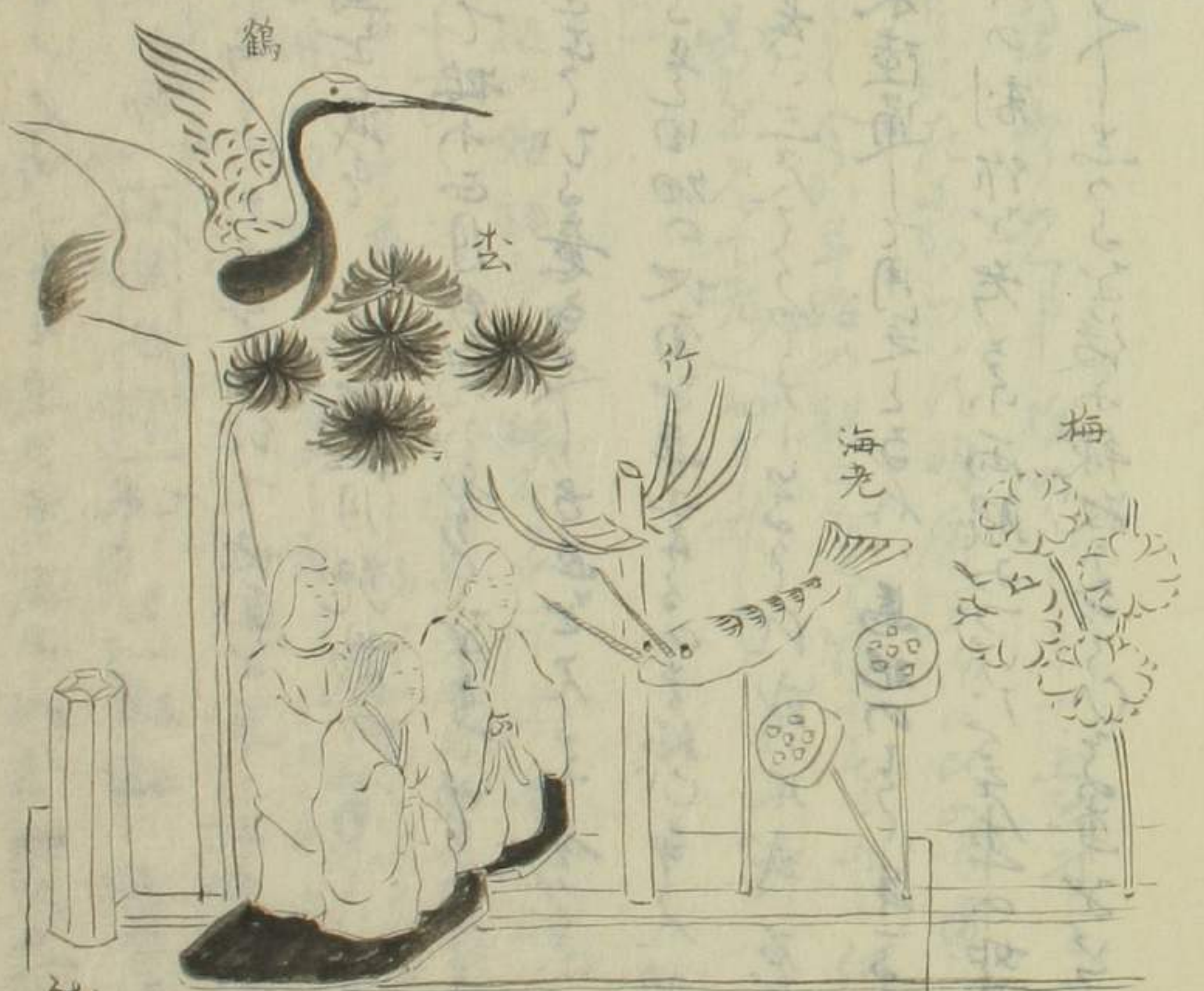
○今制練杖圖

椎より柄の端まで
 わり曲尺一尺八寸計
 おとつ子依り芳胡粉丹祿寺
 小まらりしと親親おつてり物之

清和朝雜談 卷之一の云「當代に
 皇親の御孫お變りて二三歳の
 幼更小少す練杖を依り又い傳



板小貼一鶴亀竹松と造て
 云々としるはるは是此書に
 正徳三年和漢三才圖會と同時の
 撰之當時りくしとに此の所
 ぞ今今此制なりしる下



練杖の
 椎の柄
 扇と焼の
 人形之
 立一
 年徳神
 ありし

○これ京師の人目なれり
 かつじくぬ物なれり
 昔より東国小あり
 ものあれいにてまじ
 ころあつてつていし
 かりの鳥と又うり

ちりの名に古き書小いまゝ又何うなるに近き昔造り始る物あり〜 練板と
 同物とするはひらこゝ〜 元来別物之 本草格蒙 卷之七 碌碡田畠あり形丸の
 加りて二枝あり両頭小索ありて土上を引いて地面を平らなる見あり 三才
 圖會 授時通考等小圖を載す 本邦正月兒戲のあり〜 此の形お家
 あり「醒」今此説よりて按小正月男兒小あり〜 玉をえり〜 小板をてり〜
 業のまひびを〜 農事をと〜 意あり〜 古画をえり〜 小板をてり〜
 地上を〜 仰をちり〜 返ける是田畑の地面を平らなるのまねびあり明王折が三
 才圖會を考ふる碌碡は長い三人より大なるなり〜 或は木或は石をてり〜 玉
 畜力を用て田畑の上を引水陸通して用之とされい馬肥のよう〜 牛の尾を引
 ちり〜 物あり〜 ○ちりの制作を考ふる兩眼つけたる小車の如きあり〜
 地をひく料の車少〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜

投る玉〜 ちり〜 の板を引〜 ちり〜 椎の〜 ちり〜 玉を引〜 ちり〜
 練板〜 ちり〜 物の中〜 ちり〜 した〜 ちり〜 明席〜 ちり〜 の古圖をえり〜 椎
 當〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜

○羽子板 目

正月女兒の〜 羽子板の始詳あり 下学集 二「羽子板 正月」
 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜
 今文化十年か ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜
 ちり〜 壺裏劍 茶爆竹の除小羽子板を名の〜 ちり〜 世説問答
 ちり〜 壺裏 上の表小「問て云を〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜
 事とちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜
 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜

やうありこそ板をさしれ〜んあふこふのこ〜そはさるなり」〔林邊節用〕

集ノ明徳「羽子板 胡鬼板 刊」とり 〔日次紀事〕 延宝四正月の條云

男兒 擊手練 杖玩 弓矢 女子 勤羽子本板 弄 絲 練 又

十二月市中の賣物をも〜い〜羽子本板の上畧れ羽子のこを胡鬼の

板とわれい 胡鬼板小作の借字を羽子本板の

子とつた板の方小ひりれ名れともも〜れと下字集以下の古書小羽子板

胡鬼板とわれい後の日次紀事を澄〜てい決〜るが古書を〜つて下

○さく 〔私可多咄〕 万治二年卯本 田舎人京のり〜るのり〜るを〜る羽子板と

り〜るとい〜節話を散〜るこれわ〜る古制の羽子板はゆ〜る人々の分

ま〜る形小〜るま〜るひ〜る三春羽子板とよ〜る及〜るし〜るゆ〜るは〜る

其古制の〜るま〜るを〜るゆ〜るにゆ〜るを〜る

○比叡山日先山そのが法別のま〜る小〜るゆ〜る本の子ま〜る〜る又〜るこ〜る〜る致具の羽子小形

のゆ〜るま〜るの各〜る叡山小〜る〜るま〜る〜るゆ〜る

清の松 寛文三 年制 増山井

○礮毒圖

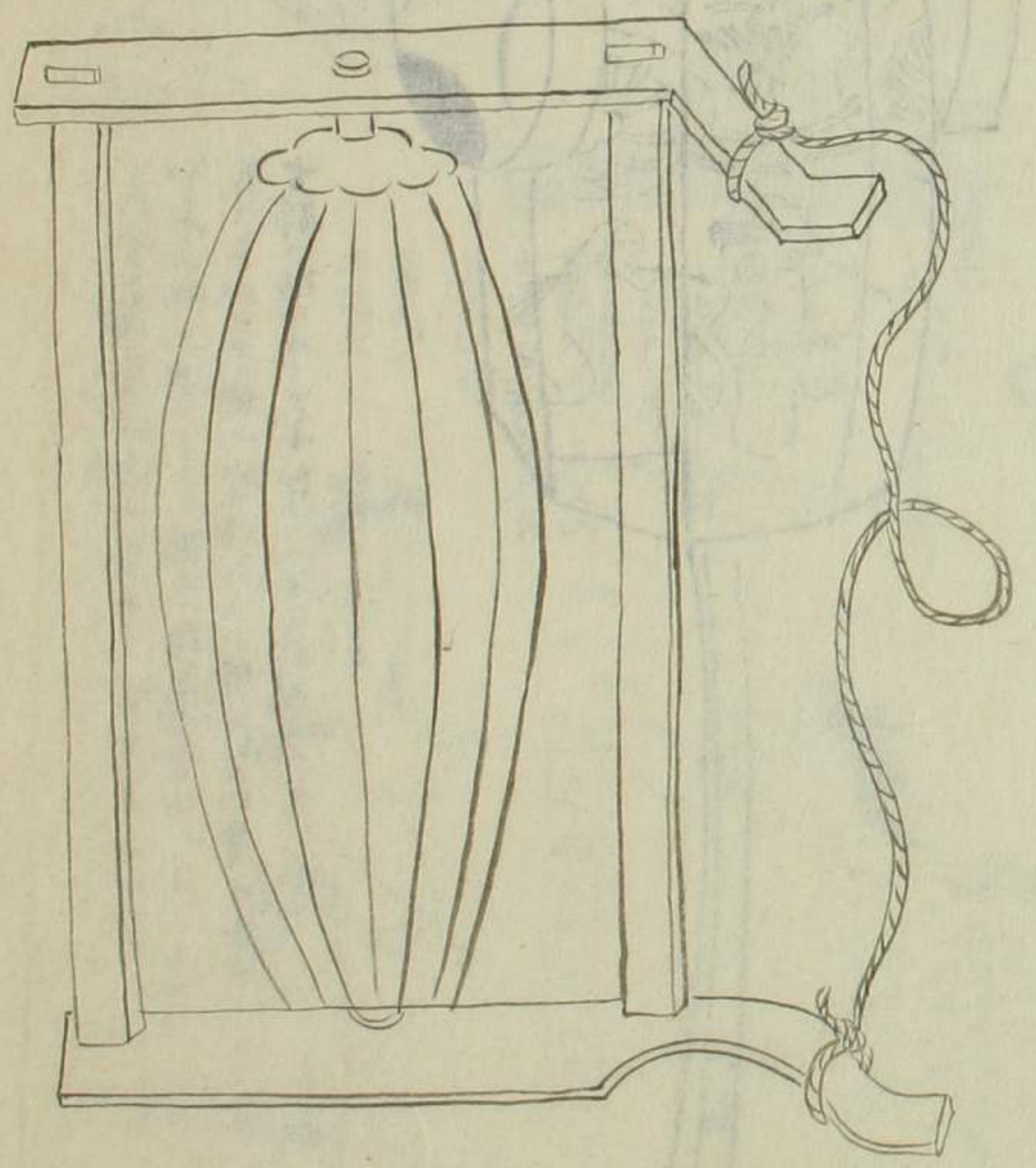
明三折り

三才圖會

器用十二の卷

小此器字載

和漢三才圖會
小礮毒の号を
いさげ延英十八
夷果也斂子の
条子礮毒田器
之本朝田家
未見之といり





明暦の比印行
一体いさ

明暦四年印行
京童

○少りくをりてはくく古書に
かくあつめ入る小なる海を
つけて地をひく仲る

貞享五年印行
日本歳時記



万治三年印行

世説問答

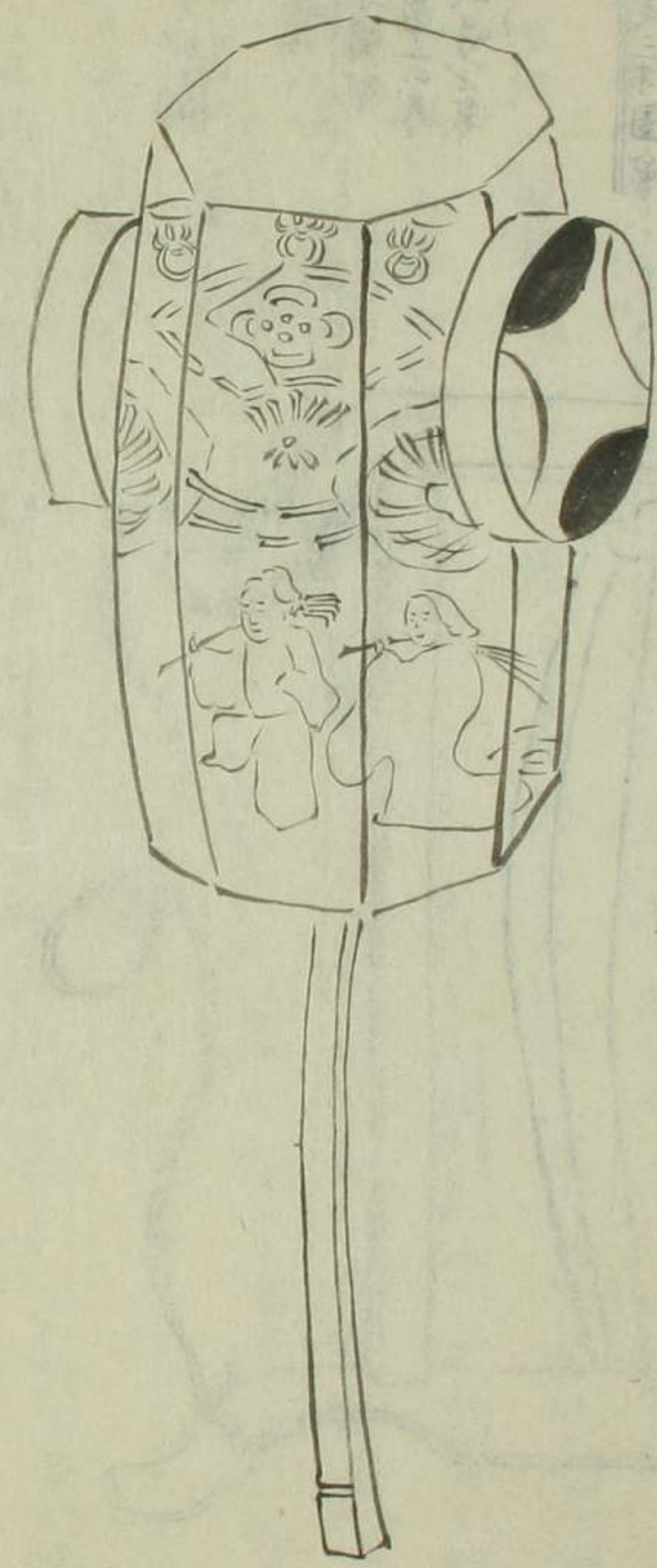
此書を以て録杖と云ふことあり
世説問答は天文の
古書なれども此は
上水の時
當時の
かきたまへ
けれは方治
の比の證と
まふ



一ひうらうらう



○ぬきくつのは



曲入小くくくくあまの長い五寸余
柄の長四寸許

これ今京師之所作の物なり本は八角のけり
りしに扇と焼くく小鶴と松を丹青めて画り
丸ことこの本地の鏡物なり柄は竹並り重なる
古制の柄なり小くくくくくくくくく

○羽子板古制

これ奥列三春小ひ子より傳へる古制あり
 制作質素なやうておのつゝ古雅あり裏小い立浪小
 鶴をいゝかゝ祖継小急がけ
 本地小胡粉をぬり善丹原をいゝとれ甲



二寸九分

此新本比

厚サ一分五厘

曲入り寸分

形がのり

五寸四分

五寸

